

第26回大分国際車いすマラソン大会

今年の大分は、開会式の実施された28日も大会当日も好天に恵まれ、出場選手たちもその家族や友人たちも、また大会関係者や多くのボランティアの方々も、暖かくて爽やかな秋の日に車いすマラソン大会を大いに楽しむことができたのではないだろうか。



開会式は、16時から大分市の中心商店街のアーケード内で、



選手たちの周りを市民が囲む中で進められた。式後は、目抜き通り沿いをパレードして、交歓会の開かれる公園に移動。交歓会では、久しぶりに再会した選手同士の話に花が咲いていた。

10月29日、大会当日は、気温の上昇が懸念されるほどの良い天気で、ウォーミングアップの選手たちも、すぐに汗ばむほどだった。出場選手が多いここ大分では、スタート前の整列にかなりの時間を要するが、その間に選手たちは、レースに向けて気持ちを集中させ、その表情は、徐々に緊張感でいっぱいになっていくのを見て取れる。

午前11時、まずフルマラソンの部が、そして3分後にハーフマラソンの部がスタート。どちらもスムーズに滑り出し、何のトラブルもなく走り抜けていく約300名の選手たちを見送った。

今回のレースでは、福岡の山本選手が、1人早々と先頭集団を抜け出したことで、誰も予想していなかった展開となる。その山本選手を追う2位集団は、約20名の大集団となった。チェンジングしながらペースを上げれば簡単に追いつける距離だったが、集団の中で権勢があったのか、落ちてくると読んだのか、差はなかなか縮まらなかった。しかし、ようやく久原の折り返し直前に、2位集団が山本選手を吸収。その時点で、集団は、海外選手2名と国内選手7名になっていた。その後、フライ選手が、トラック勝負では勝算がないと考えていた



のか、何度となくロードでの勝負を仕掛けたが、他の選手も必死に食らい付き、レースは混戦の様相を呈し、まさしく誰が優勝するかわからなかった。その混沌とした展開は、40キロ過ぎても行われていた。その決着は、ゴールとなる大分市営陸上競技場に入る直前に、タイミングよく勝負を仕掛け、トラックに1番乗りした笹原選手が、国内外の選手を振り切り、2位に1秒差の1時間24分15秒日本最高記録で、日本人選手としては、初のフルマラソ



ンの部総合優勝をかざった。

大分でフルマラソンが初めて実施された第三回大会で、最高位日本人選手と優勝者のタイム差は約15分もあった。あれから23年、数々の日本人選手たちがその差を年々縮め、ついに日本人選手が頂点に立ったのである。多くの選手がそこに立つことを目指し、一人一人が厳しい練習を積み努力してきた結果であり、同時に資金面や技術面で車いすマラソンを支えてきた多くの人たちの夢だったのではないだろうか。

暖かく風も穏やかだった今回の大分、自己記録を更新した選手も多くいたことだろう。ゴールした後には、競技場の芝生の上で、応援してくれた家族や友達と和やかに談笑する選手たちの姿がそこそこにあった。